

神話スライドset シリーズ

こいぬ座

スライド枚数	: 17枚
時間	: 6分56秒
イラスト	: 三善 和彦
	: 高部 哲也
語り	: 藤田 淑子

LIBRA CORPORATION



1. それはまだ、人間と神が同じ地上で暮らしていたずっと昔の出来事です。アクタイオンは、アポロンを祖父とし、ケイローンを育ての親に持つ、誠実で勇敢な若者でした。特に鹿狩では、彼の右にでる者はいないほど。そして、アクタイオンがし止めた鹿のそばには、いつも、忠実な猟犬メランポスがいました。



2. そんな二人の様子をほほえましく思い、見守っていたのが、月と狩りの女神、アルテミスです。アルテミスのまなざしは、月の光となって、アクタイオンの行き先を、優しく照らしていたのです。



3. ある日のこと、アクタイオンはいつものようにメランポスをつれ、鹿狩りに出かけました。



4. ところが、狩りに夢中になるうち、足下の石に躓き、転んでしまったのです。

その間に、メランポスは、獲物の鹿を追って、森の奥へと走っていきました。



5. 痛む足を引き吊りながら、メランポスの後を追ったアクタイオンですが、ふと、森の奥がぼうっと明るいのに気がつきました。

耳を澄ますと、女たちの笑い声も聞こえてきます。

「なんだろう？」

不思議に思ったアクタイオンは、そうっと近づいていきました。



6. それは、水浴びを楽しむ月の女神アルテミスと妖精たちでした。

森の奥の神聖な泉。

誰もくるはずのないこの場所で、女神たちが安心して時を過ごしていたのです。

あまりに不思議な光景に一步踏み出したアクタイオン。しかし、そのとたん、妖精たちに気づかれてしまったのです。



7. 突然あらわれた、アクタイオンの姿に妖精達は、必死で女神の回りに集まって、その体を隠そうとしました。

けれど、小柄な妖精達に神の体が隠しきれぬわけもなく、アルテミスは恥ずかしさと誇りを傷つけられた怒りで思わず叫びました。



8. 「さあ！このアルテミスは裸を見た、話せるものなら話すがいい！」

そして、アクタイオンに向かって、泉の水を浴びせたのです。



9. アクタイオンの体を、鋭い痛みが貫きました。アクタイオンは見る見る鹿に姿を変えていきます。



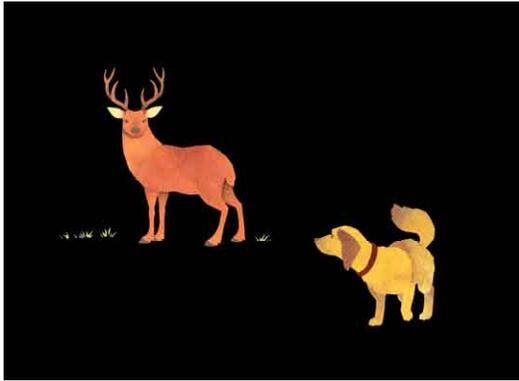
10. やがて、勇ましい若者は一頭の鹿となり、悲しげな鳴き声を残して、元の道を引き返していったのです。



11. しばらくして、気持ちの落ち着いたアルテミスは自分のした過ちに気がつきました。

アクタイオンが誠実な若者であることは、いつも空から様子を見ていた自分が一番よく知っています。そして、彼の猟犬メランポスが、どんなに主人に忠実で、獲物を見れば必ずしとめてしまうであろうことも。

いけない、アクタイオンの姿を元に戻さなければ・・・。



12. ところが、時すでに遅く、鹿になったアクタイオンは、森の中で猟犬メランポスと出会ってしまっていたのです。



13. はぐれてしまった主人のもとに、獲物を届けようと、鹿を責め立てるメランポス。まさか、その鹿自身が、当のアクタイオンだとは、わかろうがありません。「メランポス、俺だ！俺がわからないのか！」アクタイオンは、忠実な友に助けを求めようと叫び続けます、しかし、その声も、メランポスには鹿の鳴き声にしか過ぎません。



14. そしてとうとう、長いおいかげっこの末に、メランポスは、自分の主人をしとめてしまったのです。



15. メランポスは、獲物の傍らに座りこみ、とおぼえで主人を呼びつけました。けっして、帰らぬアクタイオンを待っていつまでもいつまでも。



16. この様子に心を痛めたアルテミスは、決して同じ過ちを繰り返さぬよう、メランポスを天にあげ、星座にしました。

そして今も、こいぬ座の泣き濡れた瞳は、二度と帰らぬ主人の面影をみつめ続けているのです。